

看護職部門

看護職部門 入選

家族が持ってきた一枚の写真

こいずみ
【徳島県・古泉サト子】

「そんなに泣かないで」

泣いているのは私。看護師長になって2年目、46歳。私に抱きつかれ、泣かれてしまった70歳代の女性は、母親が娘を諭しているかのように私の頭をなでながら、そう言った。

ある日の夜、私は看護師から「患者さんがいなくなった」との連絡を受け、急いで病棟に行った。その患者さんは肝性脳症の初期症状によって、時々状況判断ができなくなっていた。大勢で病院内を捜したが見つからず、警察に捜索を依頼することとなった。病院の周辺を捜しても見つからず、駐車場に帰ってくると警察犬も出動しており、私の緊張がさらに高まった。

病棟に戻るとご主人がお見えになっていた。私は、ご主人が手にしていた一枚の写真を見て衝撃を受けた。セットされた髪や訪問着から、慶事のための装いとは思いますが、その姿には自然な美しさがあった。

肝性脳症になると思考に変化をきたし、人格まで変化したか、と思われてしまうような症状が出る。この患者さんもそうであった。しかし、ご主人が持ってこられた写真には、それを思わせる姿は写っていなかった。

私は自分の間違いに気が付いた。私が捜していたのは、上下別の柄のパジャマを着てしまったり、病室がわからなかったりする患者さんであった。ご主人がこの写真を選んだ理由はなんだろう？と考えた時「これが私の妻です」。ご主人の心の声が聞こえた気がした。妻の今の姿を受け入れながらも「本当の妻はこうです。わかってください」と示してくれた気がした。

私はもう一度、建物内を捜すことにした。別館は先に捜した場所であり、一緒にいた当直師長に「そっちはさっき私が見たよ」と言われたが、なぜか気になって向かった。すると、廊下が少し明るくなり、使わなくなった診察室からゆっくり出てくる人の姿が見えた。こちらを見たその人は、間違いなくあの写真の女性であった。女性に抱きついた瞬間から涙が止まらなくなった。そして、私は彼女の優しさに包まれた。